

東マレーシアと日本の 歴史的関係に関する考察

古岡文貴 マレーシア国立サバ大学経営経済学部

ベトリス・リム マレーシア国立サバ大学経営経済学部

ロスリナ・マフムド マレーシア国立サバ大学経営経済学部

加藤 巖 所員／経営経済学部助教授

人的資源の活用に基づく地域開発モデルをアジア各国で探るプロジェクトでは、プロジェクト発足前の研究会の時期も含めて複数の報告会や国際シンポジウムを開催している。本稿は、そのシンポジウム報告に加筆修正を加えたものである。本稿内で取り上げるマレーシアでの現地調査は、古岡文貴が中心となり2人のマレーシア人研究者と随時行なったものである。また、マレー語および英語からの翻訳も古岡が担当した。日本語の文献整理および図表作成などは加藤巖が担当した。

——はじめに

本稿では、日本と東マレーシア（本稿では、ボルネオ島の現在のマレーシア領サバ州とサラワク州に相当する地域を便宜的に東マレーシアと呼称する）の歴史的な結びつきを論じる。両者のこれまでの交流がもたらしたもの、および、その歴史的な意義がそれぞれの社会の将来にどのような可能性を与えていくのかについて考えていく。

既知のように、東マレーシアは西マレーシア（マレー半島側）とは民族構成や社会組織、自然環境、資源などの面で大きく異なっている。歴史的にも、フィリピン（スルー王国）やインドネシアの一部との結びつきが強かった。すなわち、東マレーシアはマレーシア国家に内包された、ある種の独自性を持った地域社会と捉えることができる。こうした一国内の主流社会とは異なる一部地域と日本との国際関係を考えることは、国家間の政治・経済的結びつきをマクロで捉える視点に対して、新たな切り込み口を与えるものとなるだろう⁽¹⁾。また、過去30年ほどの間に高まった東南アジア地域研究に新しい視点を加えるものでもある。

(1) これまで日本とマレーシアないしは東南アジアとの関係を論じたものは、第二次世界大戦後の経済的結びつきの強弱から派生した議論が多い。国家間の経済的紐帯を巨視的な視点で見ることが主流だったといえる。

上記のような問題意識を持ちつつ、次章以降では、両者の歴史的結びつきを時代順に述べていく。本稿での時代区分は、おおむね以下のような4つの時期に分けている。

- ①16世紀から19世紀後半（戦国時代から明治初期まで）
- ②19世紀後半から20世紀前半（明治、大正、昭和の第二次世界大戦まで）
- ③20世紀中盤（第二次世界大戦期）
- ④第二次世界大戦後から現在まで

上記に加えて、さらに本稿では現地調査やインタビューを通じて確認できた事柄を織り交ぜつつ、日本と東マレーシアの間の注目すべき点についても鳥瞰的に論じていく。とくに、ボルネオ島のサバ州およびサラワク州への日本人進出の歴史点描に沿って議論をすすめている。

1——戦国時代から明治維新までの交易とイバン族の風習

明治維新以前の日本と東マレーシアの関係については、資料が乏しい。ただし、資料が少ないからといって、交易や交流がなかったわけではない。むしろ、今以上に興味深い関係を持っていたことが想起される。

日本では戦国時代から安土桃山時代を経て、徳川幕府による鎖国が始まる江戸時代初期まで、多くの商人が東南アジアを拠点とする、いわゆる南蛮貿易や御朱印船貿易に携わった。彼らは南シナ海を押し渡り、東アジアと東南アジア地域に商圏を拡げていった。その過程で、ボルネオ島をはじめアジア各地に日本人町が建設されている。

実は、16世紀末以降の日本は、世界の銀輸出の2割から3割と推計される莫大な銀を輸出し、その大半を中国の生糸・絹織物購入にあてていたといわれる⁽²⁾。ところが、倭寇が中国沿岸部を荒らしまわったことと豊臣秀吉による朝鮮侵略⁽³⁾の後遺症で、中国との直接貿易は事実上不可能となっており、その代替策として、日本の御朱印船が東南アジアへ出向き、そこで中国人から中国生糸を買っていたのである⁽⁴⁾。すなわち、当時の御朱印船貿易の大半は、中国との間の東南アジア地域を介した第三国経由貿易であったと言える⁽⁵⁾。ただし、貿易では、生糸とあわせて、染料、薬種、硝石、鉛、砂糖、鹿皮、鮫皮などの熱帯産品も取り扱われ

(2) 岸本美緒『東アジアの近世』山川出版、2001年、15―18頁。

(3) 豊臣秀吉はソウル陥落の報を受けた後、朝鮮半島のみならず、広範な東アジア全域にわたるような構想を示したという。北島万次『秀吉の朝鮮侵略』山川出版、2002年、16―20頁。

(4) 桃木至朗『歴史世界としての東南アジア』山川出版、2003年、24―25頁。

(5) 同上

ていた⁽⁶⁾。

その後、江戸時代中期以降には徳川幕府が鎖国政策を実施し、中国とオランダを除く国々との通商関係を禁じたため、長期にわたって日本と東マレーシア（当時はブルネイ王国）との交易が中断されていた。しかしながら、ボルネオ島が中国と他の地域（インドシナ半島、インドをはじめとする南アジア、中近東アラブ地域、さらにはヨーロッパ）とを結ぶ重要な海路の中間地点に位置していることから、日本との間にも間接的ながら交易・交流が存在していたのである。

事実、鎖国時代にも、中国商人は東南アジアを経由して日本へ多数来航している。同じようにオランダ商人はバタヴィアと台湾経由で、先述の生糸を日本へ運び入れていた。このように、鎖国が始まった後の日本でも、中国人とオランダ人の手を借りて、東南アジアとの貿易は続けられたのである。実のところ、世上有名な香辛料貿易は利潤が薄かったので、オランダ人も東南アジア経由で中国貿易の仲介をしているというのが実情であったという⁽⁷⁾。

鎖国開始後の長崎貿易は、その約3分の2を中国船が占めていたと言われるが、詳しく見ると、中国の貿易船には華中からの「口船」、華南からの「中奥船」、そして、東南アジアからの「奥船」があった⁽⁸⁾。また、中国人が航海と商業実務を行なうものの、アユタヤ王が派遣しシャムの役人が乗り組んで長崎へ来航する「暹羅屋形仕出し船」まであった⁽⁹⁾。さらには、長崎貿易の残り3分の1を占めていたオランダ東インド会社の実質的な本拠地は、ボルネオ島南方にあるインドネシア・バタヴィアであった⁽¹⁰⁾。

すなわち、日本と東マレーシアの間には、その時々

図表1 御朱印船の渡航先と渡航回数

渡航先	回数
コーチシナ	75
シャム	56
ルソン	54
トンキン	49
カンボジア	44
台湾	36
マカオ	18
パタニ	7
チャンパー	6
漳州	2
ピサヤ	2
ブルネイ	2
田弾	2
澎湖島	1
モルッカ	1
マラッカ	1
合計	356回

出所：桃木至朗『歴史世界としての東南アジア』山川出版、2003年、24頁より作成。

(6) 須藤利一編『船——ものと人間の文化史1』法政大学出版局、1975年、98頁。

(7) 桃木至朗『歴史世界としての東南アジア』山川出版、2003年、24～25頁。

(8) 同上

(9) 鎖国以前だが、1621年にはシャム（暹羅）のアユタヤ王国使節船が長崎へ来航している。アユタヤ王の正使クン・ピチュット・ソンバットと副使クン・ブラサートが随員20名を伴っていた。この船には日本人の伊藤久太夫ら20人も同乗しており、日本人町頭領の山田長政の書状（土井大炊頭宛て）を携えていたという。白石一郎『海のサムライたち』NHK出版、2003年、136～140頁参照。

(10) 当時、各地にあったオランダ東インド会社商館の報告書が、バタヴィアにあったオランダ総督府で日記体書き留められている。例えば、1624年2月6日（日本の年号では元和9年12月18日）の項では、長崎にいる上席商務員カンブスという人物が「半羅紗二百反、内訳赤百反、黒五十反、色物五十反を日本商人3人に分割引渡しの契約にて売り渡し、これに対して手付金千ドカート（ducaten）を受け取りたることを通知し、（次の）最初の便船によりて右羅紗を当所（バタヴィア）より発送せんことを請えり」などとある。村上直次郎訳注・中村孝志校注『バタヴィア城日誌。』（東洋文庫170）平凡社、1970年、34頁。

の濃淡はあるにしても、歴史上途切れることなく、通商関係をはじめ、人的交流や文化交流が行なわれていたと推測されるのである。

ところで、以前、筆者らは東マレーシアに住むイバン族の風習について調査したことがある。イバン族は、その昔「首狩り族」として恐れられていた勇敢な民族である。このイバン族の伝説の1つに「イバン族は日本からやって来た」というものがあつた。初めて、この説を耳にした時は、意外な取り合わせと思われたが、よく考えてみれば、日本の侍も勇敢で武勇に長けた階層であり、戦で相手の首を切り落とし、切り落とした相手の首を戦果の証拠として持ち帰る風習があつた。こうした同種の行為から類推される社会慣習の同質性から、「イバン族が日本から来た」という口承伝説が生まれたのかもしれない⁽¹¹⁾。

実際、南蛮貿易船の乗務員の一定数は東南アジアで雇用された人びとであつた。なかでもスペイン船でその比率が高く、フィリピン人水夫が操船の主役を担っていたと言われる⁽¹²⁾。その南部フィリピンと北ボルネオは一衣帯水であり、フィリピンのスルー諸島と北ボルネオは1つの王国を形成していたこともある⁽¹³⁾。現在でも、水上での行き来が盛んであり、(適法な移民であるとは限らないが)北ボルネオの各地にフィリピン人居住者の姿を見ることが多い。したがって、北ボルネオの人びとが水夫として南蛮貿易に従事し、日本へやって来たことの可能性は否定できない。

上記以外にもイバン族の風習と日本の風習の類似点は指摘できる。最も卑近な例では、イバン族は米から酒をつくる技術と習慣を持っている⁽¹⁴⁾。一昔前の日本のように、イバン族の村々では現在でも濁酒づくりが盛んに行なわれており、各家、各村で異なった濁酒づくりの伝統がある。客人を濁酒で酔わせて歓迎する風習も日本の古い風習に類似していると言えるだろう。こうした酒づくりの風習や

(11) 戦国末期から江戸時代初期までの間に日本へやって来た人々が、諸々の日本の社会的慣習を持ち帰り、現地で紹介したことは、想像に難くない。当時は、東南アジア各地に日本人町が建設され、現地に定住する一定数の人々がいた。御朱印船や南蛮貿易船で人々の行き来があつた。飯本信之・他(編)『日本の歴史』(学習百科大事典)学習研究社、1975年、335-339頁参照。

(12) 鶴見良行『マングローブの沼地で——東南アジア島嶼文化論への誘い』朝日新聞社、1994年、40-43頁。

(13) 同上書、45-46頁。

(14) イバン族の濁酒はツアックと呼ばれ、陸稲を発酵させてつくられる。独特の風味がある。口当たりも比較的良い。以下、ボルネオ島に関する複数の著作を持つ安間繁氏の文章の抜粋である。「禁止の酒がある不思議。14世紀後半-16世紀、琉球は東南アジアで大活躍した交易国家であつた。そんな中で、泡盛(蒸留酒)の製法技術は、15世紀の後半にシャムから伝えられたと言われている。東南アジアの伝統的な酒は3つに大別できる。麴を使った酒とヤシ酒、およびそれらから造る蒸留酒である。ただ、イスラム教は禁酒が建前であり、イスラム教徒が多いカリマンタン、ブルネイでは造り酒屋はないし、自家製の酒も表向きはない。(中略)(そんな中)イバン族はモチ米と餅麴を使って発酵させ、布で漉して酒にする。そして、この酒から蒸留酒も造る。サバにはムンタコという蒸留酒の工場が1つだけある。これも泡盛に似ているが、アルコール分は20度を超えない」。なお、イバン族の多くは非イスラム教徒であり、飲酒や豚肉も禁忌ではない。

酒席での客人の歓待といった風習は、イスラム国家のマレーシア国内においては、地域的な特徴である。また、さらに幾つかの文物や言語、文化的側面で東マレーシアと日本の間の共通点が指摘されることがある⁽¹⁵⁾。

2——からゆきさんと日系移民・日系企業の進出

明治以降、相当数の日本人が東マレーシアに移り住んでいる。この日本人移民のなかでも最も特異な現象は、いわゆる「からゆきさん」が多数含まれていたことであった。彼女達は、外務省の分類では「芸妓、娼妓、酌婦其他」とされていたが、そのほとんどは事実上の娼婦だったと考えられている⁽¹⁶⁾。

「からゆきさん」が生まれた背景には、日本は前渡し金で娼婦を遊郭に拘束するという、言ってみれば、人身売買同様の封建的公娼制度を第二次世界大戦時まで維持していたことと、明治維新の開国と同時にその娼婦供給システムが国外で需要を見出したことが挙げられる⁽¹⁷⁾。

こうした「からゆきさん」と蔑視をも含む呼称で呼ばれた日本人女性たちが、日本移民のさきがけとして存在したことは、疑いのないことだと思われる。「からゆきさん」が東マレーシアにも早い時期から一定数在住していたことは、山崎朋子著『サンダカン八番娼館』などを通じて広く知られている⁽¹⁸⁾。

もちろん、日本人の東南アジアへの移民史の中で、だれが、本当の先駆者であったかについては諸説あり、はっきりとした結論はないが、「からゆきさん」がアジア地域において日本人居住地がつくられる際に重要な役割を果たした傍証は数多い。その主な理由としては、以下の3点を指摘しておきたい。

- 1) 「からゆきさん」は、日本人がほとんど存在しないところにも最初に定住した。
- 2) 19世紀後半、東南アジア各地で、日本人町が形成されていくことになるが、「からゆきさん」とその関係者が在留邦人数の上では中心的な存在であった⁽¹⁹⁾。

(15) 17世紀以降、東南アジアの各地から動植物や飲食物が日本へ持ち込まれたことはよく知られている。例えば、17世紀初めごろ、南蛮貿易時代には唐辛子、ジャガイモ、南瓜などが東南アジア経由で日本へ持ち込まれた。また、東南アジアの猫が南蛮貿易船に乗って（ネズミ対策のため）、日本へ連れてこられたことが分かっている。こうした文物と共にやって来た人達の一部が定住した、ないしは、南蛮貿易船でやって来た人達が日本の文物、習慣を現地へ持ち帰ったとの仮説は、十分に検討に値する妥当性を持つものかもしれない。

(16) 岡部牧夫『海を渡った日本人』山川出版、2002年、56頁。

(17) 同上

(18) 他の著作には、山崎朋子著『サンダカンの墓』文藝春秋、1987年などがある。

(19) どの民族でも移住先の社会では、はじめ女子の人口が極端に少ないのが普通である。ところが日本人移民社会では、娼婦の存在から、一般に女子のほうが多い現象が見られる。日本人居住者は女子だけという例もままあった。岡部牧夫『海を渡った日本人』山川出版、2002年、58頁。

3) 「からゆきさん」に対する需要が存在したために、日本からの女性の供給が継続的に行なわれた⁽²⁰⁾。

歴史的には19世紀半ばの開国と社会秩序の急変にともなう混乱期、明治維新とその後の近代化の中で、九州を中心とする貧しい農村・漁村出身の女性が家庭の経済的理由から、あるいはだまされて、日本から遠く離れた東南アジアへ出稼ぎに来るようになり、19世紀末には、その数は5,000人を超えたと言われている。

こうした「からゆきさん」たちは、その過酷な労働条件を耐え忍び、その収入の中から儉約・貯金をしては、家族に送金を行なった。この貴重な海外送金が、例えば、兄弟姉妹の教育費になったり、日常の生活費として費やされたりしたことは想像に難くない。

「からゆきさん」たちは、自らを犠牲にして、日本の家族の生活を支えたと言えるかもしれない。この意味では文字通りの「人的輸出」で贖った生活支出であった。しかしながら、家族のために大きな犠牲を払った女性たちを日本政府は最初から無視し、最後には切り捨てたとも言える。日清・日露戦争で勝利を収め「列強」の仲間入りを目指した当時の日本政府は、「からゆきさん」たちの存在を国の恥として認識していた様子もうかがえる⁽²¹⁾。

実は、筆者らは今から20年ほど前に「からゆきさん」の最後の生き残りであろう女性にインタビューしたことがある。その女性が住む家を訪問し、その女性とその息子（マレーシア人の夫との間に生まれた）に会った。その女性は、質問を注意深く聞きながらも、具体的な返答を返してはくれなかった。女性との間に十分な信頼関係を醸成するには、インタビューの時間だけでは十分ではなかったのかもしれない⁽²²⁾。ただし、女性が深く重い個人の歴史を持っていることが伝わってくるインタビューであった。研究者の立場としては感傷的に過ぎると批判されるべきだが、老女が何か昔のことを思い出すように遠くを見つめていた姿は今でも忘れられない。

さて、前述の如く、「からゆきさん」とその関係者が先駆者となって形成されることが多かった日本人町には、日本人商人の経営する雑貨店、歯科医、写真店などが次々と開店し、なかには商売を広げて貿易を行ない地元の有力者となるような成功者も現れた。

戦前の大小さまざまな日系企業のなかでは、マレー半島側のジョホール州で鉄

(20) 同上。日本国内への送金は、当時の貴重な外貨獲得手段であった。

(21) 当時、海外の日本人妓楼の存在は、国の内外から批判されており、1920年にシンガポール総領事館が管内業者に廃業を行政指導するなど、政府も規制に動き始めていた。結果として娼婦の一部は廃業し帰国したが、現地に留まって私娼化したものも多かった。岡部牧夫『海を渡った日本人』山川出版、2002年、60頁。

(22) 優れた著作を残した先述の山崎朋子は、元からゆきさんの老女の元で共に暮らし、その中で詳細な過去の話聞き出している。

鉱業を経営していた石原産業が有名であるが、東マレーシアのボルネオ島にも、サバ州のタワウに久原農園が、また、サラワク州には日沙商会などの有力企業がかった。

久原農園は、戦前の財閥の1つである久原財閥（後の日産コンツェルン）の経営していた農園で、マニラ麻とゴムを栽培していた。一方、サラワクの日沙商会は依岡兄弟によって設立された会社で農園などを経営し、ゴム以外にも米やパイナップルなども栽培していた。

サラワクで大きな影響力を持つこととなった日沙商会の歴史は、非常に興味深い。同商会の歴史は、創業者の依岡省三がサラワクを訪問した1910年にまでさかのぼる。この年、ゴム農園に適した土地を探していた依岡は、サマラハン川沿いの肥沃な土地に目をつけ、当時のサラワク政府に農園開発のための土地の賃貸を申請した。ところが、1911年にサラワク政府の許可が下りる直前になって、依岡はマラリアで亡くなった⁽²³⁾。

その後、依岡省三の遺志をついで、実弟の依岡省輔が仕事を引き継ぎ、1917年に日沙商会を設立した。会社の主な事業内容は、サマラハン川沿いのゴム園の経営だったが、サラワク内の慢性的な米不足を解消するため、サラワク政府の奨励を受け稲作も始めることになった。ただし、ほとんど人跡未踏と言っても過言ではないボルネオ島のジャングルを開拓して、米をつくるということは、予想以上の難事業であった⁽²⁴⁾。

図表2 地域別に見た移民の数

年代	タ	イ	マラヤ・シンガポール	フィリピン	インドシナ	北ボルネオ・サラワク
1886～1890		13				
1891～1895		136	452			
1896～1900		86	473	17	26	
1901～1905		16	177	5,223	47	3
1906～1910		9	314	956	91	14
1911～1915		5	1,225	3,465	85	26
1916～1920		22	1,889	8,594	62	147
1921～1925		9	1,041	3,236	46	53
1926～1930		30	2,645	11,127	56	350
1931～1935		75	2,408	6,143	87	659
1936～1941		104	1,185	10,900	102	1,577

出所：岡部牧夫『海を渡った日本人』山川出版、2002年、15頁および、国際協力事業団『海外移住統計昭和27年度～平成5年度』より作成。

(23) borneo.web.infoseek.co.jp/nennpyou1.htm 参照。

(24) ボルネオ島の東隣にあるマルク諸島において、京都大学の渡部氏が実施した調査で現地の農民が「めんどろすぎて稲など作る気にならない」「苦労が多すぎるのだ」と述べている。熱帯気候のジャングルは風通しが悪い上に湿度がきわめて高いこともあり、稲のような手間の掛かる作物よりもサゴヤシ（でんぷん）やキャッサバの方が好まれるのかもしれない。渡部忠世『アジア稲作文化への旅』日本放送協会出版会、1987年、212～213頁。

最大の課題は、稲作に熟練した労働者の確保であり、このため、日沙商会は、日本で米作のための入植者の募集を行なうことにした。募集に応じて、日本からサラワクに入植した者の大多数は、沖縄県と北海道出身だった。しかしながら、過酷な労働条件と厳しい自然環境のため、病気で倒れる者、一年も続かずに仕事を辞める者が続出した。加えて、1931年の満州併合とそれに伴う反日感情の高まりから、地元の中国系住民との間で軋轢が生まれ、日本人入植者たちへの嫌がらせも頻発した。ついには1937年11月、最後まで残っていた沖縄出身の開拓者たちの帰国が決定し、その後は、現地の住民だけで農園を經營することになった。日沙商会自体はその後も經營を続けたが、1945年の日本の敗戦と、その後の混乱のために40年近く続いた歴史の幕を下ろした。

数年前に、サマラハン川沿いの日沙商会の農園があった場所を訪問したことがある。全盛期には、小さいながらも日本人学校、日本人の經營する商店や病院などがあったと聞いている。しかし、今では創業者の依岡省三を祀った依岡神社以外に農園の歴史を物語る建物は何もない。昔は交通の便も非常に悪く、農園の近くを流れるサマラハン川が外部との連絡路であり、入植者たちの主要な交通手段はボートであったことを考えると、入植の苦闘の歴史が偲ばれた。

3——第二次世界大戦期

長期的な観点から見ると、第二次世界大戦は、東マレーシアにおける日系人社会の持続的な発展と、日本・東マレーシアの長期的な関係に好ましくない影響を与えたことは間違いない。

歴史を学ぶものは、「もしもあの事件が起こらなかったら」とか、「もし、戦争を回避できたら」などの解答不能な問いに頭を悩ますことがある。ここでも仮に、第二次世界大戦が発生しなければ、かなりの数の日系移民が現在でも東マレーシアに在住し、マレー系やその他のブミプトラ系、中国系、インド系に伍して、マレーシア社会で、政治・経済分野を中心に、かなりの影響力を持つことになったのではと想像することができる。例えば、現在、日系移民が数多く暮らしているラテン・アメリカのペルーで、アルベルト・フジモリ氏⁽²⁵⁾が大統領に選出されたように、日系マレーシア人が、マレーシア政界でも大きな力を発揮したかもしれない⁽²⁶⁾。

(25) フジモリ元大統領の日本名は、藤森謙也である。

(26) 鎖国政策の結果、17世紀末には日本人は東南アジアから姿を消した。次に日本人が登場するのは250年後である。ちなみに、1549年から1603年まで駐マニラのフィリピン副総督だったスペイン人モルガという人物が当時の日本人観について「日本人達は誇り高い人種で、勇敢で精力的であり、苦難に遭っては断固たる行動に出る。また誠実な人間で、洗礼を受ければよい信者になる。そしてなるべく早く日本に帰りたいが。さらに現地の人に対して威張りたがる」と述べている。三浦朱門『東南アジアから見た日本』小学館、1976年、109—110頁。

さて、マレーシア住民の尊い命を奪い、その生活に甚大な影響を与えた太平洋での戦いは、日本軍によるマレー半島東海岸のコタバル上陸から始まった。一般的には、映画などを通じてハワイの真珠湾攻撃が有名であり、太平洋戦争はこの真珠湾攻撃をもって始まったと認識されがちだが、時系列の順では、コタバル上陸のほうが、真珠湾攻撃よりも2時間ばかり早かったのである。

1941年12月8日、佐美 浩^{たくみひろし}少将率いる支隊がマレー半島東岸のクランタン州コタバルへ上陸した後、日本軍は猛スピードでマレー半島を南下し、占領地域を拡大していった。ついに1942年1月31日、マレー半島最南端のジョホールバルに到達した。そして、2月15日には、英軍の一大拠点であったシンガポールをも陥落させたのである。

一方、東マレーシアに関しては、1941年12月15日にサラワク州のミリ付近の油田を占領した。ここを足場にして、12月24日にはサラワク州の中心地であるクチンを占領した。続いて、1942年1月1日には英軍の拠点であったラブアン島、同8日は、ジュセルトン（現コタ・キナバル）を占領した⁽²⁷⁾。

10年ほど前、日本軍の上陸したコタバルの海岸を視察に行った。午後の日差し
の強い海岸線には、50年以上前の激しい戦闘を偲ぶものは、何もなく、日本軍が
防衛に使ったといわれるコンクリートで作られた小さな小屋が波に打たれていた。
その近くには、マレー・カンポン（“マレー人の村”の意味）があり、小さな子ども
たちが高い声を上げながら、裸足で遊んでいた。こんな楽園のような場所を、
武力で荒らしていった日本軍の野蛮な行為を想像することさえ困難であった。日
本人として深く恥じる思いが自然に湧き上がってくるような風景であった。

さて、日本軍のコタバル上陸から始まった戦争は、半世紀以上経過した現在でも、過去の問題として扱うことの出来ない数々の難題を残している。比較的有名な「慰安婦」や「南京虐殺」などは、今でも新聞紙上や雑誌、学界などで取り上げられることが多い。日本と隣国（中国・韓国・北朝鮮）の相互関係に過去の日本軍の蛮行が影を落としている事は否定できない。

数多い未解決で残された戦後処理の中でも比較的知られてはいないが、重要な問題の1つに「兵補」と呼ばれた人びとに対する補償問題がある。日本軍は戦地の拡大に伴う、日本人兵士の不足と占領地の治安確保のために、現地人を補助兵（兵補）として雇った。しかしながら、日本軍にとって戦況の悪化とそれに伴う経済社会の混乱のために、「兵補」に対する給与が適切に支払われなかったりする事態がしばしば発生した。また、「兵補」の人びとが積み立てていた日本軍発行の軍票による貯金が、戦後には価値がなくなるといった問題も起こった。

東マレーシアを含む東南アジア各地で募集された「兵補」の人びとは、ある時は、日本兵の手足となってその兵務を補佐し、またある時は、日本人を助け、文

(27) <http://www.yume-ya.co.jp/sasuco/borneo3.htm> 参照。

字通り、その活動を補い汗と血を流した。こうした元「兵補」の人たちの現状を考慮すれば、何らかの形で、その労務に報いるのは、人道的見地から見ても当然と思われる。ただし、日本政府は残念なことに今でも「兵補」と呼ばれた人びとの存在した歴史的事実には蓋をしているのが実情である。国際法と二国間条約の取り決めなどに基づくという弁済は十分とは言えない。すでに第二次世界大戦の終了から60年以上が経過し、元「兵補」の方々もかなりの高齢になっている。今後の10年程度が何らかの政策的補償を実施できる最後の機会になると考えられる。

筆者らは、ペナン州において日本軍元「兵補」の生き残りの方々から体験談を聞き取りしたことがある。週末などを利用して元「兵補」の方々の家を訪問し、インタビューを行なった。

ある老人は、質問に注意深く答えながら、苦労の多かった兵役の体験を聞かせてくれた後、日本兵に教わったという「赤とんぼ」を歌って聞かせてくれた。「夕焼け小焼けの赤とんぼ、負われて見たのは、いつの日か」と細々と歌うさびれ声は耳に残っている。その歌声はインタビューを実施してから、随分と年月が過ぎ去った今でも、時折、老人達の儂げな様子と共に思い出される。

4——戦後の日本の経済発展と東マレーシア

日本国内でも第二次世界大戦の間に、多くの人が家や仕事、財産、家族、親戚を失った。一方、終戦直後に発生した外地からの引揚げ者や軍隊からの復員によって労働供給量が急速に拡大した。そこで、日本国内の労働需要は低下していたため、失業者が街にあふれることとなった。人びとは、深刻な食料不足に悩まされ、外国からの援助物資と乏しい蓄えの切り売りで、飢えをしのぐという状態が続いた。

しかし、日本社会は歴史上最大級の混乱から、不死鳥のようによみがえり、ごく短期間のうちに「奇跡」とも称される驚異的な経済発展を成し遂げた。終戦後11年しか経過していない1956年には、経済白書が「もはや戦後ではない」と記すまでに経済力が回復した。

日本の「奇跡」と呼ばれた戦後の経済発展は、国民の所得を高め、人びとに雇用の機会を提供した。1950年代初頭から第一次石油ショックまでの期間は、ダイナミックで明るい日本経済の「青春期」とも呼べる時期であった。しかしながら、その一方で、水俣病に代表される公害が各地で発生した事実も見落とすことはできない。

反面教師の意味で、マレーシアなどの発展途上国が日本の高度経済発展期から学ぶものがあるとするならば、日本が迅速に経済を発展させたという事実よりも、「なぜ日本の急速な経済開発が不可避免的に自然環境の破壊につながっていったのか」という側面であろう。すなわち、経済発展を遂げつつあるアジア各国にとっ

ては、経済発展と環境保全のバランスを保つことへの注意喚起として、日本の高度経済発展期の事例を学ぶ意味があることと思われる。なぜならば、東マレーシアの熱帯雨林の森が伐採され、生態系が破壊されている今こそ、60年代から70年代の環境問題からその対処方法を学んだ日本の事例がまさに役立つと考えるからである。ましてや現在、高い環境技術を持つ複数の日本企業が東マレーシアをはじめ東南アジア諸国へ進出しており、そうした技術移転の機会がある。

高度経済成長以降の経済活動の国際化に伴って、日系多国籍企業による、マレーシアをはじめとするアジア諸国への直接投資が始まった⁽²⁸⁾。まずは、貿易関連の商社が先陣を切った。続いて、大手製造業が安価な労働力と現地の市場を求めて韓国、台湾、シンガポール、そして、マレーシアへ進出した。その後、上記の国・地域に続く国々も出てきて、自国の工業化のために外国投資を活用する戦略を取るようになった。さらには、1985年のプラザ合意に端を発した「円高」の影響により、第三国向け輸出を目的とする製造業もアジア諸国に工場移転を図るようになった。これに引きずられるようにして、日本の中小企業も製造拠点をアジア諸国に移すようになった。言い換えれば、日本の製造業は日本国内にある本社を中心に、アジア諸国で重層的な製造業ネットワークを構築することに成功したのである⁽²⁹⁾。

東マレーシアの日系企業に関して言及すると、サラワク州には製造業関連の日系企業が2社ある。また、サバ州には木材貿易関係の業務に携わっている日系企業が数社ある。しかしながら、サバ州では、日系企業の数は一減りつつあり、一時は2,000人近くいた在留邦人も、現在では200人以下にまで減少している。こうした事実は少々残念なことに感じられるが、既存の経済関係を越えた、東マレーシアと日本との新しい関係を構築する時期が到来しているとも考えられる。この一方で、1980年代後半から、東マレーシアは日本の資源供給基地の様相を見せている。日本にとって、東マレーシアは以前から知られる木材輸出をはじめとして、天然ガス、石油、パーム油などの貴重な調達先となっている。この意味で、日本人の日常生活に東マレーシアの物品がますます組み込まれたと言えるだろう。

——結論にかえて

現在まで連綿と続いている東マレーシアと日本の関係は、恐らくは歴史書に記録が残る以前から始まっている。近代以降には、日系移民の先駆者である「からゆきさん」たちが築いた基盤をもとに、多くの日本人町、そして、日系企業が誕

(28) 佐久間信夫（編著）『現代の多国籍企業論』学文社、2002年、202－208頁。

(29) 最近では、東南アジアへの直接投資が減速している。その代替地として中国が直接投資受入れの中心地となった。このような外国投資に支えられて、中国は「世界の工場」として台頭し、世界経済の中心の1つになりつつある。

生した。その後、棄民とも称された「南方移民」の隆盛を見た後、悲惨な戦争時代に突入した。

第二次世界大戦時、日本軍は短期間ながらも東マレーシアを占領し、粗暴とも言える統治方法で現地の住民を服従させた。先述のように敗戦から60年以上過ぎた今でも、未解決の問題が残されている。なかでも、日本軍に協力した元「兵補」の人びとが、現在でも救済を求めて活動しているという事実は重い。近代史を振り返る時、決して忘れてはならない事項である。

戦後、日本経済は奇跡と呼ばれるほどの経済発展を遂げ、その経済力を復活させた。そして、前述のように貿易と投資のサイクルを通じて、東南アジアに巨大な製造業ネットワークを構築することに成功したのである。

見方を変えれば、戦前・戦中に日本軍が軍事力を使って作ろうとした「大東亜共栄圏」が、戦後、経済論理の名の下、民間企業の経済力を梃子とした「アジア経済ブロック」として復活したと言えるかもしれない。当然ながら、戦時中の「共栄圏」とは名目だけのものであり、軍事力を背景として日本が他のアジアの国々を搾取していた事実を忘れてはならない。一方、戦後の「経済ブロック」も欧州共同体のような正式な機関を持っていない。すなわち地域経済圏としては、いまだ未成熟なものであることが指摘される。

こうした外的環境があるなかで、東マレーシアと日本との関係で絶えず想起されることは、「さまざまな歴史的経緯を持つ、東マレーシアに日本は何を残してきたのか。また、今後は何を残していくのか」という問いである。設問の前半部分「何を残したのか」という問いは、「東マレーシアでは、日本人が残したものが人びとの生活を向上させていくのか」と言い換えてみたい。

英国は東マレーシアを100年以上にわたって支配したが、その統治方法が歴史的に鍛え抜かれたもので、ある時は融和的、別の機会には厳しい管理を行ってきた。他国との比較対照で単純に、その優劣や善悪、歴史的妥当性を判定することはできないのだが、学校や病院、道路などをマレーシアの地に作って、その経済発展を支える社会インフラを残したことに疑いの余地はない。

一方、日本の場合、戦中の残虐な行為と、戦後は日系企業で朝から晩まで現地の労働者たちが安い賃金で働いてきた事実のみが、マレーシアの人びとの記憶に残るならば、それは外交上ばかりか安全保障上も、かつまた、人道主義的な観点からも寂しい限りである。

現在の両者の関係に希望を見出すとするならば、それは、マレーシアの人びとのために捨て身で努力している日本人が、東マレーシアの地に存在するという事実である⁽³⁰⁾。そうした尊い献身をしている日本人の存在が、今後の良好な関係を

(30) そうした1人として、東マレーシアのクチンとシブに拠点を持つN氏がいる。同氏は、日本での官僚生活に区切りをつけてマレーシアのパナン州に居を移し、複数の実証研究を行ない、現地のニーズ

築いていくことは言うを俟たない。

先にも触れたように、東マレーシアには豊かな自然が残されている。そして、日本にとって貴重な資源の供給源となっている。現地の環境保護に取り組む日本の市民団体や青年海外協力隊などの活動も近年活発化している。日本の地方公共団体が技術と人材を提供する環境保護活動も始まっている。さらに、東マレーシアにあるマレーシア国立サバ大学（Universiti Malaysia Sabah）と日本の公的機関と複数の大学が森林資源および海洋資源の保護管理のために共同研究を継続的に行なっている。こうしたプロジェクトのなかには、日本の子どもたちと現地マレーシアの子どもたちを対象とした環境保全のための教育プログラムなども含まれている。こうした取り組み、とくに若い世代への教育的施策は、将来の日本と東マレーシアとの間の良好な関係を生み育てる土壌となるに違いない。

〔ふるおか ふみたか／Beatrice LIM／Roslinah MAHMUD／かとう いわお〕

に基づく社会福祉施設の建設に尽力された。現在は、サラワク州にて活動を拡大している。N氏に関して、ある雑誌によせられた文を引用する。「私が5月にこのセンターや作業所を訪れた時（注：ベナンにある作業所）、そこで働いている知的障害を持つ人々が見せてくれたいきいきとした笑顔には強く心を動かされました。さらに、この作業所で働いていた一人が脳卒中に倒れ、リハビリを経て、作業所で働きたいという気持ちと仲間からの支援があったことで、今では立派に社会復帰したことにも驚きを隠せませんでした。しかし、同時に、人間の強さと可能性は、障害を超えうる、本当に強く大きなものに違いないということを確信できました。また、このような活動を展開しているN先生（原文本名）が日本人であることも嬉しく感じています」。情報誌『しゃりばり』2002年8月号（No.246）。